

摂食障害者のセクシュアリティ —食と性との観点から—

圓 田 浩 二

要 約

摂食障害者はしばしば性的虐待の犠牲者であると語られたり、あるいは恋愛依存症やセックス依存症を併発すると指摘される。本稿は、摂食障害者のセクシュアリティの実態を明らかにすることで、彼女ら／彼らの食と性との関係を分析する。

そこで本稿では次の二つの問いを設定する。①「摂食障害において食と性は関連しているのか？関連があるとすれば、どのような関係なのか？」、②「摂食障害者のセクシュアリティはそれ以外の人々と同質なもののなのか？違いがあるとすれば、何がどう違うのか？」。

使用されるデータは、筆者が収集した35人の摂食障害者に対する面接インタビュー調査と日本国内で行われた全国規模の質問紙調査とで得られた二つの調査結果である。分析の結果、摂食障害において食と性は強く関連していることと、摂食障害者のセクシュアリティはそれ以外の人々のそれと同質なものであったが、摂食障害者はその心理的・情緒的な面において困難を抱えていることがわかった。

キーワード：摂食障害、セクシュアリティ、インタビュー調査、食と性、社会学

1. 問題の所在：食と性

摂食障害は今日無視できない隠れた社会問題となっている。摂食障害は拒食症と過食症の二つに大きく分けられる。単純化して言うと、両方とも食行動のコントロールに関わる病気、あるいは障害である。拒食症は食えることができなくなり、反対に過食症は食べ過ぎることに対してコントロールがきかなくなり、しばしば自己誘発性嘔吐をとまなう。

また、摂食障害は罹患する者の性別が女性に大きく偏っており、しかもその年齢が十代・二十代の年齢に集中しているという特徴をもつ。ちなみに、厚生労働省の調査では、日本における摂食障害者の患者数は1980年人口十万人あたり1.5-1.8人であったが、1998年には18.5人となり、約十倍に急増している。そして、青年期から若年成人期の女性の過食症の有病率は1-3%と言われている。米国では、若い女性の0.1%前後が拒食症で、2%前後が過食症と推測されている(赤城高原ホスピタル「摂食障害の基礎知識」<http://www2.wind.ne.jp/Akagi-kohgen-HP/ED.htm>)。

本稿では摂食障害における食と性の関係を考察する。その理由は次のような問題が摂食障害研究を進める中で浮かび上がってきたからである。それは摂食障害者のセクシュアリティにかかわる問題である。摂食障害者は食に関する嗜癖と言われているが、同じ嗜癖という観点から見れば、摂食障害者が恋愛嗜癖やセックス嗜癖、売春行動などの性的逸脱行動を併発するケースがしばしば指摘されている(<http://paco2.com/imode/setu09.htm>)。これは合併嗜癖行動と呼ばれている。

また、摂食障害者の多くが過去に性的虐待に遭っていたという指摘がなされている。摂食障害は、その両親が幼少期に彼女ら／彼らに対して性的に虐待を行ってきたことの結果であると考え

るセラピストや研究者が存在している [Ofsh & Watters 1996 p.71]。「多くの摂食障害の女性たちは、アンジェラのように、暴力や虐待に体を支配された経験を持っている。しかも、しばしば保護してくれるはずの世話人の男によってなのである」[Young-Eisendrath 1993 p.9]。

このように、摂食障害において食と性はなんらかの形で関連しているように考えられる。そこで、本稿では二つの簡単な問いを立てることで、摂食障害における食と性の問題を考察してみたい。それらは、①「摂食障害において食と性は関連しているのか？関連があるとすれば、どのような関係なのか？」、②「摂食障害者のセクシュアリティはそれ以外の人々は同質なもののなのか？違いがあるとすれば、何がどう違うのか？」である。この二つの問いを明らかにすることで、「摂食障害はなぜ性的逸脱行動を合併するのか？」、あるいは「摂食障害者は性的虐待の経験者か？」という問題への解答を導き出してみたい。

本稿ではこれらの問題を解くために、次のような方法を採択する。それは文献調査と社会調査である。文献調査では、摂食障害と性との関係を取り扱った著作や、摂食障害者自身の語りを使用する。また、社会調査については、インタビュー調査と全国規模の質問紙調査 [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002] のデータを使用する。インタビュー調査については、筆者が1997年から2003年までに行った面接インタビューで収集された摂食障害者35名のデータを使用する。

次章では、摂食障害者における食と性の関係について、文献資料を中心に考察を展開する。

2. 摂食障害者における食と性の関係

2-1. 食と性の関連性

食と性の関連性はしばしば指摘されるが、その関連性は明確なものではない。その関連性とは何だろうか？それは人間が生物としてもつ根元的な欲求という点にあるだろう。「食物、性、攻撃性は人間の生活の基本的な三つの側面である。人間は長期にわたって栄養を貯めておくことはできないので、生きていくためにはしょっちゅう食べなければならない。性的な表現は、生殖の手段であると同時に、重要なコミュニケーションの手段でもある。攻撃性というのは、私たちそれぞれが他者に対して自分自身の欲求を通そうとする手段であると私は定義している」[Young-Eisendrath 1993 p.1]。ここでは、人間が生きていく上で必要な三つの要素の中の二つとして食物と性が取り上げられ、根元的な欲求として食欲と性欲が併置させられていることがわかる。イギリスの社会学者アンソニー・ギデنزは、セックスへの欲求と並んで、人間にとって「食欲も基本となる本能的欲求」[Giddens 1992=1995 p.117] であると位置づけている。

摂食障害は、簡単に言えば、食に関する障害である。本稿の主題である食と性はどう関連しているのだろうか？ギデنزは、現代社会を生きる女性、とりわけ若い女性たちにとって、摂食障害が今の時代の病理となっている状況をなんら不思議なことではないと指摘する。そして、彼はその理由を次のように述べている。「なぜなら、ダイエットは、人びとがうまく対処しようと懸命に努力している社会変動に満ちた状況のなかで、身体の外見と自己のアイデンティティ、セクシュアリティを互いに結びつけているからである」[Giddens 1992=1995 p.54]。ギデنزは、常に変動してゆく現代社会の中で個々人がその容姿とアイデンティティ、セクシュアリティを「個人」のものとして、常に管理・加工・表現して行かざるを得なくなっており、摂食障害はその現れであると考えている。つまり、摂食障害は単なる食に関する障害ではなく、個人の「身体の外見と自己のアイデンティティ、セクシュアリティ」に密接に関係した現象であり、問題なのである。

また、心理学者の小倉千加子は若い女性がかかりやすい摂食障害について、食と性の観点から次のように述べている。「食と性は通底している」と言われているように、セクシュアリティの問題も潜んでいます。いわばジェンダーとセクシュアリティの結節点に摂食障害は位置するのです」[小倉 2001 p.2]。彼女は摂食障害を取り上げて「食と性は通底している」という観点から、女性というジェンダーにおける性と食との関連性を指摘している。

女性の摂食障害者におけるセクシュアリティを考える上では、よく指摘されるのが摂食障害という病気のもつ疾病利得である。摂食障害になって、極度に痩せたり、太ったりすることで、その女性は男性から性的な対象として見られること、つまり男性の視線を意識しなくて済むようになる。これが女性の摂食障害者の疾病利得である。ある摂食障害の女性は、「こんなからだから男の人が近寄ってくるはずはない」ということを自覚した上で、るい痩や肥満の体になることを肯定している。「体重が普通であったころ、私は周囲の期待に脅えていました。また、近寄ってくる男性を避けねばなりません。しかし、太りだしてからは、そうしたことを考えなくて済むようになりました」[Abraham & Derek 1987=1989 p.86]。

本稿は、摂食障害における食と性との間に何らかのつながりがある点についてギデンズや小倉と認識を共有している。しかし、それは対異性との関係で見た時の摂食障害者の身体という観点からではない。摂食障害者とセクシュアリティの関係について、もう少し性について踏み込んだ考察を行いたい。「私は、日々の官能的な性体験のかわりに、食事をしに外出したりしていたものでした。実は、そのあたりから問題は始まっていたのです」[Abraham & Derek 1987=1989 p.49]という摂食障害者の言葉に見られるように、具体的に摂食障害者の性行動を分析する。そして、「摂食障害者のセクシュアリティはそれ以外の人々は同質なものなのか？ 違いがあるとすれば、何がどう違うのか？」という問題を明らかにしたい。

2-2. 摂食障害者における性的志向

1987年に合衆国で出版された『摂食障害の事実』(原タイトル"Eating disorders")では、「摂食障害と性」という章が設けられている。この章が設けられた理由は、「私たちが研究の対象とした摂食障害の女性では、食行動と性行動の間にはある関連が見られた」[Abraham & Derek 1987=1989 p.49]からであるとしている。その結果わかったことは、摂食障害者の性行動について、四つパターンが見られたことである。その四つとは、「性を否認するもの」、「性に対してあいまいなもの」、「性に対して消極的なもの」、「性に対して積極的なもの」である。ここで取り上げられた摂食障害者はすべて女性である。なぜなら、この文献が書かれた時代には男性の摂食障害者の存在自体が稀少であったためであると考えられる¹⁾。したがって、この分析は女性の摂食障害者の性行動についてのものであることを注記しておきたい。

この文献では、症例として四つのタイプの摂食障害者が取り上げられている。順に見ていこう。「性を否認するもの」の症例として、拒食症で無月経になった28歳のクラリッサの事例が取り上げられている。彼女は月経やセックス、性欲、性感情などを否定し、性的な関係へと発展することを恐れて、人間関係にさえ支障が出ていた。「男性でも女性でも友だちが欲しいと思うこともあったが、親密になって性的関係に発展してしまうとどうにもできなくなるのではないかと恐れて、結局友人を作ろうとしなかった」[Abraham & Derek 1987=1989 p.53]。

「性に対してあいまいなもの」に属する症例は、26歳のサマンサの事例である。彼女の拒食症は性的な事柄と深い関わりをもっている。初潮、月経、自慰、男性との交際、初交、結婚などに対して、彼女は自分はどう向き合えばいいのかという葛藤を抱いていた。その葛藤を回避するために、ダイエットに励み、拒食症となった。このタイプの摂食障害者は、自分が性的に正常かど

うかという不安を抱えながら、その性行動が正常と見なすことができたなら、その行為を楽しむことができる。「性的なものを受け入れることができるように感じるようになるまでは、そうしたかわりを延ばそうとして、摂食障害になっているように見える」[Abraham & Derek 1987=1989 p.54] とされる。

次の症例は、25歳のハリエーである。彼女の性行動は次のように記述されている。「フェラチオのようなものでは「決して真の楽しみは得られず」、むしろ受け身でいる方を好み、性交においては受動的な正常位でしかしようとしなかった。彼女は、マスターベーションにも罪悪感を覚えており、その「代用」として過食してしまうとも述べている」[Abraham & Derek 1987=1989 p.61]。彼女は「性に対して消極的なもの」の症例である。彼女は、セックスに対して消極的で、マスターベーションに罪悪感を覚えており、その代用として過食を行ってしまうと話している。

また、24歳のブレンダは「性に対して積極的なもの」の症例である。「彼女は、性的な欲求や「たくさん食べたい」という誘惑の両方を恐れるような状況において、最も嘔吐しやすいと感じていた」[Abraham & Derek 1987=1989 p.65]。彼女の事例では、性的な欲求と過食への欲求が高まる時、最も嘔吐しやすくなる。この場合、性的な欲求と過食への欲求は同質なものとして語られている。

【表1】摂食障害と性

タイプ	性欲・性行動への態度	摂食障害と性欲との関係
性を否認するもの	否定	否定
性に対してあいまいなもの	あいまい	引き延ばし
性に対して消極的なもの	やや否定	代用
性に対して積極的なもの	肯定	同質

以上をまとめてみると、【表1】のようになる。「性を否認するもの」は、自己の性欲や性行動を否定し、自らの性欲や性的対象となることを否定するために、摂食障害になる。「性に対してあいまいなもの」は、自己の性欲や性行動に対して否定も肯定もせずあいまいであり、自らの性欲や性的対象となることを引き延ばす手段として摂食障害者となるが、次第にこのことを受け入れるようになる。「性に対して消極的なもの」は、自己の性欲に対してやや否定的に振る舞い、その性行動は消極的である。自らの性欲や性行動に罪悪感を覚え、その代用として摂食障害特有の行動を示す。「性に対して積極的なもの」は自己の性欲や性行動を肯定し、性欲と過食への欲求は同質なものとなり、摂食障害の行動は性的な欲求の表現でもある。

2-3. 摂食障害者の性行動

次に、摂食障害者のセクシュアリティの提示や、摂食障害者における食と性の関係を示唆している文献を見てみよう。

まずは、1998年に合衆国で出版された摂食障害者の自己伝記『こんな体、大きらい!』（原タイトル"Wasted"）である。彼女は重度の摂食障害者であった過去を振り返って、食物と恋愛について次のように述べている。「食べ物や恋人を受け入れることは、自分に弱さと欠乏感があることを認めることであり、肉体の歓びを感じたいという欲望を認めることであり、自分自身のより原始的な「劣る」部分に屈服することだ」[Hornbacher 1998=1999 p.132]。彼女にとって、

過食嘔吐を行ったり、セックスをしてしまうこと自体は嫌悪の対象である。それは、「自分」という存在の不完全さを、弱さと欠乏感という形で露呈することであり、食と性という原始的な人間の「劣る」部分に屈服することを意味していた。

また、彼女の観察では、摂食障害者たち、この場合は摂食障害の女性たちは、いくつかの動機でセックスを行っていた。「摂食障害者病棟では物笑いの種になったけれど、人によっては、単純にカロリーを消費するためにセックスをする。ただその場合でも、人前に裸をさらす不快感はあるが、自分の肉体に、空腹以外のものを感じる感覚がまだ残っている、という切ない喜びを味わいたくて、セックスをする女もいる。ただし性の欲望は本質的には飢餓感と同じものだから、これも自分を裏切ることがある。また、自己破壊の一手段としてセックスを使うものもいる。私はここにも入る」[Hornbacher 1998=1999 p.282]。彼女が知っている摂食障害者は三つの動機でセックスを行う。一つ目は「カロリーを消費するため」の手段として。二つ目は「自分の肉体に、空腹以外のものを感じる感覚がまだ残っている、という切ない喜びを味わう」手段として。三つ目は自分を傷つけ、嫌悪するための「自己破壊の一手段」として、セックスを行う。

次に取り上げるのは、1993年に日本で出版されたある摂食障害女性と男性芸術家との対話形式の日記『プリミアーナ』である。この文献では、過食や嘔吐が性的なメタファーによって語られる。「過食や嘔吐は、咽頭という粘膜が要求する性器化であり、自分に向けた残酷な攻撃という色合いなのだろう」[山口・ささらえ 1993 p.29]。この箇所では、性器の粘膜が口内の咽頭の粘膜と対置され、摂食障害者の行う過食や嘔吐は咽頭の粘膜を刺激する攻撃的な意味合いでとらえられる。そして、この推定から次のような考えが導き出される。「わたしは咽喉でセックスをしているんだわ」[山口・ささらえ 1993 p.53]。この摂食障害者の女性は、自らの過食嘔吐を咽喉で行うセックスととらえている。

ここでの過食嘔吐＝セックスという図式の意味を考えると、口唇が陰唇に、胃袋が子宮に、吐き出される食物はペニスや排出された精液に該当していると解釈できる。そしてこの女性は、過食嘔吐の衝動が自分のもつ創作エネルギーを吸収してしまうと分析している。「果てしない嘔吐。繰り返される流産。人工中絶。中絶。そういえば私は、いつも何かやりとげようとしているとき、論文でも作品でも小説でも何でも、おしまいのもう一息という所でこの過食衝動に圧倒されて、エネルギーを浪費していました。つまり私は何かを生み出そうとする際の陣痛に辛抱できず、指を突き刺して墮胎してしまうんだわ」[山口・ささらえ 1993 p.112]。

「その頭の真ん中についている口唇というのはそれこそ脳みその性器だと言えませんか。胃袋が子宮というわけ。そして私はたらふく詰めこんで、食欲に吐き出し、そしてまた食べるという筋書き。果てしなく繰り返される性交。これが.....！これが..... ああ、今気がついた。これが私のオナニーなんだわ！」[山口・ささらえ 1993 p.112]。この記述において、彼女はこれまで考えてきた過食嘔吐がセックスと同質のものであるという考えの誤りに気づき、もっとふさわしいメタファーとしてオナニーを選び取る。

同様に、過食嘔吐とセックスやオナニーを対比する文献はもう一つある。1992年に出版された『あかるく拒食 ゲンキに過食』である。この文献の中で、24歳の男性ヤスオは、過食嘔吐とセックスやオナニーについて、「過食嘔吐とセックスが似てるという先ほどの話でちょっと思ったんですけども、セックスというのは相手が必要なことですよね。過食嘔吐は自分でやっていること」と話し、「過食嘔吐とオナニーが一緒ではないかと思えます」[伊藤・斎藤 1992 p.153]と述べている。

確かに、過食嘔吐はどちらかと言えばセックスよりもオナニーに近い。なぜなら、オナニーは一人で行うことが可能だが、セックスは一人では行えず相手が必要だからである。過食嘔吐は、

通常人がいない時間と場所で、こっそりと誰にも見られる、見つかることなく行うものだからである。私が過去にインタビューした一人の摂食障害の女性は、過食嘔吐を行う時空間を、「この世間と離れる」、「世界から隔離される」、「この世の私ではない」[圓田 2000 p.88]と語っていた。過食嘔吐とセックスやオナニーが関連づけられ、過食嘔吐のメタファーとして性的行為が使用される背景には、両者のもつ共通性があるからなのだろう。その共通点とは、身体性、秘匿性、非日常性であると考えられる。

次章では、筆者が収集した摂食障害者に関するデータを分析する。

3. インタビュー・データの分析

3-1. インタビューの方法

筆者は、1997年から2003年までの間に、日本国内において、計35人に摂食障害のインタビューを行ってきた。その内訳は男性2人、女性33人である。年齢は15歳から36歳まで平均年齢24.7歳、居住地域については、東は東京から西は長崎までである。この中には、インタビュー時に、医療機関で治療を受けていた者、入院していた者、過去に医療機関に通ったことがある者、全く通ったことがない者、既に治癒・回復した者など、さまざまな人々が含まれている。したがって、筆者が収集したインタビュー・データで扱う摂食障害者は、専門家によって診断・認定された「摂食障害者」ばかりではない。しかし、明らかに、長期にわたって、「食」に関する障害を自己認知し、さまざまな困難や苦しみを抱えてきた人々であった。

インタビューは直接会って話を聞く形式で行われた。インタビュー時間は一回最低一時間、時には三時間近くに及ぶこともあった。また、何度か時間をおいて複数回のインタビューを行ったケースもある。インタビューは、まずインフォーマント（情報提供者）に自らの摂食障害歴を語ってもらい、それを聞いた筆者がその都度質問をはさみながら進行し、最後に前出の『あかるく拒食 ゲンキに過食』という本に掲載されていた質問リスト [伊藤・斎藤 1992 p.9-13] の自己改訂版を、インタビューの締めくくりとして用いることで、終了した。

こうして集められたインタビューには、摂食障害者のセクシュアリティに関する項目がいくつか存在していた。例えば、性的なパートナーの有無から、異性観や異性歴、摂食障害者のセックス観、性行動まで、摂食障害者のセクシュアリティに関するさまざまなデータを可能な限り集めることができた。中には、話すことを拒否する場合や、雰囲気的に相手に聞くことができなかったケースもあり、統一的なデータではない。しかし、摂食障害者のセクシュアリティについて、官庁や医療機関が行ったものではない、ある意味で非常に貴重なデータでもある。次節ではその詳細を見てみよう。

3-2. インタビュー・データの概要

取り上げる項目は、性的パートナーの有無、異性歴、セックス体験人数、オナニー体験の有無、セックスに対する態度、オーガズムの有無、痴漢・セクハラ・レイプなどの性被害の有無である。まず概要を見てみよう。

性的パートナーの有無については、「結婚しているか?」、「ステディな関係をもつ異性のパートナーがいるかどうか?」という質問を行った。答えを得られたのは35人全員で、「あり」が13人、そのうち3人が結婚していた。性的なパートナーの数は1人がほとんどであったが、1人の専業主婦は夫以外に不倫相手がいると話した。

異性歴については、「これまでの男性経験を教えてください」か、あるいは「セックスを行った人数を教えてください」という質問を行った。回答を得られたのが32人、このうち未性交の者

が5人であった。未性交の者の年齢と性別は、15歳の女性、16歳の女性、24歳の男性、28歳の女性、31歳の女性である。さらに、3人以下の経験人数をもつ者が12人となり、全体の三分の一以上を占める。逆に、10人以上のセックス体験人数をもつ者は9人であり、全体の三割近くになる。最高は28歳の女性の76人である。彼女は援助交際や性風俗で働いているのではなく、つまりセックスを売買しているのではなく、単純に個人的な関心でセックスをした相手の人数や特徴をメモに記録しているため、この数字が出てきた。10人以上のセックス体験人数をもつ者の中には、援助交際でセックスを行っている・いた者も5人存在した。ただし、これらの数字は、インフォーマントの年齢幅が大きいため、一概に多い・少ないと言うことは危険であるが、極端に多い、少ないというばらつきがあるように感じた。

オナニー体験の有無については、「オナニー、あるいはマスターベーションは行いますか？」という質問を行った。回答者数は26人で、15人がオナニーをしたことがあると答えた。この15という数字は過去を含めての数である。オナニーの方法は指でクリトリスを刺激するという方法がほとんどで、ヴァギナに指や物を挿入する者はごくわずかであった。異性歴の数とオナニーの有無との関係については、セックス体験人数が3人以下の者は12人で、そのうちオナニー経験をもつ者は7人、ないのは3人、不明が2人となる。また、10人以上のセックス体験人数をもつ者9人のうちオナニー経験をもつ者は4人、ないのは3人、不明が2人となった。異性歴の数とオナニーの有無との関係については異性歴が多いほどオナニー経験者が増えるというわけではなく、異性歴の数とオナニーの有無の間には何らかの関連性はないように考えられる。

セックスに対する態度については、「セックスを楽しむか？」という質問によって得られたデータを集計した。回答者は30人、「楽しむ」と答えたのは13人、「楽しまない」と答えたのが17人であった。「楽しむ」と答えた者の中にはセックスによる快感よりも、抱いたり抱かれたり、肌を触れ合わせることで得られる安心感をあげる者も何人かいた。「楽しまない」と答えた者のうち、セックスを経験したことがない3人を除くと、セックスを経験したことがありながらセックスを楽しめない者は14人となり、「楽しむ」と答えた者よりも1人だけ多い。

オーガズムの有無については、「オーガズムを得ますか？」や「イッたことがあるか？」という質問を行った。回答を得られたのは31人で、「ある」と答えたのが17人、このうち2人がオナニーでオーガズムを得ている。また「ない」と答えた14人のうち、セックスを経験したことがない3人を除くと、セックスを経験したことがありながらオーガズムを得ていない者は11人となる。

面白いことは、「セックスを楽しめない」と答えているのに「オーガズムを得る」と答えている者が、オナニーではオーガズムを得ると答えた1人を加えると5人いる点である。このことは、「セックスを楽しむ」ことよりも、「オーガズムを得る」ことが容易であることを示しており、それは身体的な快感よりも心理的な快感が得にくくなっていると考えられることもできる。つまり、摂食障害者は異性との関係において心理的満足を得にくい状態に置かれているとも考えられる。さらに、「セックスを楽しむか」と「オーガズムを得ますか」という質問から、回答の得られた約半数が「ない」と答えていることから、摂食障害者はその身体とセックスとのバランスが取れていないことを示しているように推測できる。

痴漢・セクハラ・レイプなどの性被害の有無については、インタビュー全体を通じて登場してくるエピソードで判断した。家族の話や学校生活、仕事、異性関係、セックス経験などの話をうかがう中で、性的虐待やセクハラ、レイプなどの話題が提供される場合がある。性被害があったのは35人中6人で、その内容はレイプ、兄によるセクハラ、痴漢などである。この調査からは「多くの摂食障害の女性たちは、暴力や虐待に体を支配された経験を持っている」[Young-Eisendrath 1993 p.9]ということはいえないようである。

また、この35人のうち、売買春を行ったことがある・行っている者が8人いた。援助交際が7人、性風俗が1人、このうち両方とも経験していたのが1人である。すべて女性である。この中には、筆者が行っていた援助交際に関する調査研究 [圓田 2001b] において、援助交際を行っているインフォーマントの話聞いた際に、摂食障害者であったとわかったケースも含まれている。もちろんその逆のケースもあった。この8人という数字は全体の二割強で、高い数字と言えるだろう。これは、摂食障害者のセクシュアリティの揺らぎを示していると考えられる。

3-3. インタビューに見る摂食障害者のセクシュアリティ

【表 2】 摂食障害者のセクシュアリティ

項目	性的パートナー	性交	オナニー	セックスの楽しさ	オーガズム	性被害	売買春
あり	12	26	15	13	17	6	8
なし	23	5	11	17	13	—	—
不明	0	4	9	5	5	—	—

インタビュー調査の結果をまとめてみると、【表 2】 のようになる。これらの数字は体系的なものではないが、摂食障害者のセクシュアリティを考える上での一応の目安として提示している。またこれらの数字はインタビュー時に得られたものであって、インタビュー期間が六年に及ぶことを留意してもらいたい。

摂食障害者のセクシュアリティを考えるために、20代の女性の摂食障害者23人のデータと、性行動・性意識について行われた全国調査 [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002]²⁾とを比較する形で考察してみたい。性交経験率、オナニー経験率、オーガズム経験率、性的被害遭遇率について各数字を比較してみよう。

20代の女性の性交経験率に限ってみると95%となり、この数字は全国調査で得られた20代の女性の数字87% [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 p.196] よりも若干高めである³⁾。

次に、20代の女性のオナニー経験率に限ってみると39%（「なし」35%、「不明」26%）となり、この数字は全国調査で得られた20代の女性の数字50% [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 p.232] よりも、一割ほど低い。この理由は、インタビューで得られた回答が74%であり不明が26%あったのに対し、全国調査では無記入が5%であることを考えると、インタビュー調査の不明分をオナニー経験率の「あり」と「なし」に上乘せすれば、ほぼ同数となると推測できる。

また20代の女性のオーガズム経験率に限ってみると48%（なし40%、不明12%）となる。この数字は全国調査で得られた過去一年間でセックスで得られたオーガズムに関する20代の女性の数字78%（「必ずあった」、「たまにあった」の合計） [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 p.202] よりも、インタビュー調査での不明分を加えたとしても、ずっと低く約半分値である。

最後に、すべての摂食障害者の性被害遭遇率を見てみると17%となり、この数字はさきほどの調査で得られた性的被害経験ありの数字19%（「そのようなことはない」、「無記入」以外の合計） [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 p.235] と、ほぼ同じ値である。第1章で問いとして掲げた「摂食障害者は性的虐待の経験者か？」の答えは、摂食障害者が普通の人とほぼ同じ性被害の経験率を占めているため、そうではないと言えるだろう。

以上、インタビュー調査結果と全国調査の結果とを比較してみると、20代の女性限定ではある

が、性交経験率がほぼ同じ、オナニー経験率が低めであるが不明分を加えて修正すればほぼ同数、オーガズム経験率約半数、性的被害遭遇率ほぼ同じとなった。このことから、20代の女性の摂食障害者は、性的行動については全国の同世代の女性と変わらない。しかし、对人的な性的行動については、身体的・心理的な受容（オーガズム）に関して、全国の同世代の女性よりも困難を抱えていることが推測できるだろう。

4. セクシュアリティと摂食障害

4-1. 摂食障害者のセクシュアリティに関する考察

最初に、第1章で提示した二つの問いのうち、②「摂食障害者のセクシュアリティはそれ以外の人々は同質なものなのか？違いがあるとすれば、何がどう違うのか？」については次のように答えることができるだろう。摂食障害者のセクシュアリティはその行動面においてそれ以外の人々と同質であると言える。しかし、心理・情緒面においては、問題を抱えていると。その問題とは、性的パートナーとの関係に問題があると考えられる。それゆえ、オーガズムが獲得しにくく、セックスそのものを楽しむことができにくくなっているケースも存在すると考えられる。

次に、①「摂食障害において食と性は関連しているのか？関連があるとすれば、どのような関係なのか？」という問いについて考えてみよう。この問題は、摂食障害者において食欲と性欲がどう関連し合うかという問題である。本稿では、これまでの考察から「関連はある」と考える。その形式は、【表1】で見たように、否定、引き延ばし、代用、同質があり、決して摂食障害とセクシュアリティとは無関連なものではないと言えるだろう。

否定の場合、性的成熟の問題が女性の摂食障害には重要で、この事態を避けるために食欲を否定し、やせ細ることで、性的成熟を回避しようとする。拒食症患者に多い。引き延ばしは女性の摂食障害者に見られる性行動に対して躊躇するケースで、その躊躇が性行動の引き延ばしにつながる。代用は、自己の性欲を否定することの代わりとして、食欲が利用されるケースである。同質は、食と性欲とが同一化されており、食欲が昂進すると性欲も昂進し、その逆も同じというケースである。

また、2-3で見たように、過食嘔吐とセックスやオナニーが関連づけられ、過食嘔吐のメタファーとして性的行為が使用される背景には、両者に共通性があるからなのだろう。その共通点とは、本能的な欲求、身体性、秘匿性、非日常性であると考えられる。

以上の考察から「摂食障害はなぜ性的逸脱行動を合併するのか？」という問いには、次のように答えることができる。摂食障害者は筆者が行ったインタビュー調査と全国調査を比較する限りにおいて、そのセクシュアリティは行動面について大きく異ならない。ただその心理的・情緒的な面に関しては、摂食障害者は満足感を得にくく、異性関係は不安定である。中には、援助交際や性風俗などの売買春に携わった者も少なくなかった。

摂食障害者が恋愛依存症やセックス依存症を併発することが報告されるのも、摂食障害者のもつセクシュアリティの不安定さ、異性との適切な恋愛関係を構築することの困難さに起因していると考えられる。女性のセックス依存症を研究しているシャーロット・カズルは「ほとんどの女性におけるセックス嗜癖的行動の背後には、現在進行中のパートナーとの関係性に対する願望が存在している」[Kasl 1989 p.50]と分析する。「現在進行中のパートナーとの関係性に対する願望」とは、パートナーとの関係性を発展させたいという願望である。例えば、「彼女のパートナーが彼女とのセックスを望まない場合、セックス嗜癖に陥った共依存症の女性は動揺するかもしれない。しかし、そのことはセックスに対する彼女の願望を再保証して、彼女のパートナー

が彼女のことを心配するという証明となる」[Kasl 1989 p.54]と述べている。カズルの記述は自己のアイデンティティやセクシュアリティに不安を抱えている摂食障害者にも当てはまり、摂食障害者が恋愛依存症やセックス依存症を併発する理由を指摘している。それゆえに、摂食障害者たちは、すぐに異性を好きになってしまう傾向をもつ恋愛依存症や、恋愛感情をあまりもたないがセックスに関心がありすぐに性関係をもってしまう傾向をもつセックス依存症などの合併嗜癖を起こしやすいと考えられる。

4-2. 食と性に関する社会学的考察

もう少し食と性について考えてみよう。アダムとイブの神話では、禁断の木の実を食べた瞬間に、二人は裸体であることの恥ずかしさに気づき、セクシュアリティに目覚める。これは食と性の関連を示す最古の寓話だろう。また、ヘブライ語では、「食う」という動詞はセックス（性交）を意味しているとされる [Millett 1970=1985 p.116]。

性と食はともに本能的な部分をもつ。性は種の保存本能によるものなので、本質的には利他的である。食は個体の保存本能によるものなので、本質的に利己的である。性も食も社会の影響を受けて、その観念や表現形式は変化する。

例えば、食はマナーや儀礼を教え込むことで、動物らしさを隠蔽し、排除してきた。普通の社会生活を送っている成人であれば、食べ物を見て涎を垂らしたり、箸やフォーク、スプーンを使用せずに動物のように口を食べ物に近づけて音を立てて食べたりはしない。

しかし、セックスは社会化できない（あるいは難しい）ため、公然の場所から、つまり人々の目から隠されてきた⁹⁾。このように、セックスから動物的な部分を排除することは難しいのである。上品な映画や少女マンガなどのフィクションで描かれるセックス・シーンのようには、現実のセックスを美しく行い、見せることはできないのである。セックスの社会化の難しさは、現代日本社会で多発する性犯罪にも見ることができると言える。性欲や性行動を社会化することは難しいのである。

この観点から見れば、摂食障害とは、実のところ、食欲の社会化の失敗例とも考えられる。摂食障害者は自らの食欲をコントロールできないと訴える。自分の意志や理性の力によっては、自らの食欲をコントロールできていない。摂食障害のきっかけとしてよく取り上げられるダイエットは、人間の意志で食事量を制限し体重をコントロールし、結果的に人間の食欲をコントロールする行為であった。しかし、ダイエットによって、心と身体のバランスが壊れると、摂食障害に陥ってしまうと、自らが食べようと思っても、あるいは食べないように試みても、実行できなくなる。拒食症者や過食症者はそのことを語る。ここに、社会学的な意味はあるのだろうか？

現代社会は個人に一定の自由と権利、責任、そして尊厳を認めるという前提で成り立っている社会である。また一方で、複雑で分化した社会を維持、発展させていくために、制度化や管理化、監視化を推し進めていく社会でもある。現代社会において、個人は自由や責任という名目のもとで、「私」に対して計画を立て、「私」を管理し、そして他者とのコミュニケーションを行い、文化の名のもとで意識的・無意識的にさまざまなイデオロギーや表象を受け入れ、時には自らで作り出して、他者とともに現代社会の中で生きていかねばならない。

このことは、「ホモサピエンス」と名付けられた動物を、「人間」にすることでもある。人間は、文明の名のもとで、あらゆるものを数量化や予測可能なものとして把握し、規格化・システム化していくことで、「人間」の社会化や個人化を推し進めてきた。それは、動物としての人間を、身体への規律や訓練を通して飼い慣らし、「人間」化していくことであった。しかし、現代社会において、人間の「人間」化はある限界を見せているのではないだろうか？ 現在、「人間」の身

体的に帰属する食と性に関係する社会問題である摂食障害や性犯罪の増加は、このことを示唆しているのではないだろうか？今後もこの問題について考察を続けていく予定である。

注

- 1) 男性の摂食障害者については、圓田浩二「摂食障害男性の原因論」にその記述がある。
- 2) この調査はNHKが企画し、1999年の11月25日から12月12日までの18日間、日本全国の16歳から69歳までの男女3600人を層化二段無作為抽出法によって選定し、面前記入密封回収法によって、調査票を調査員が回収した。調査有効数は2103人、有効率58.4%であった [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 p.14]。
- 3) 筆者の行ったインタビュー調査ではセックス＝膣性交をさすが、この全国調査ではセックスを、性器挿入（膣性交、肛門性交）と、性的快感をともなう性器への接触として想定している [NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 p.9]。
- 4) もしセックスが社会化できるならば、食事のマナーを参考にして、セックスには次のような作法が採択されるかもしれない。セックスの最初と終わりには特有の挨拶や儀礼が行われる。音を立てない、立てるとしても心地よい音を立てる。ベットでの位置どりの指定や、体位に関する形態や順序の指定がなされる。ベットを汚したり、布団やシーツを乱したりしない。セックスの相手を好き嫌いで選択することは好ましくない。

文献

- Abraham, Suzanne & Llewellyn-Jones, Derek, 1987, *Eating disorders: the facts* (2nd ed), Oxford University Press : 1989 『摂食障害の事実』 中根允文・藤田長太郎訳 星和書店
- Giddens, Anthony, 1992, *The transformation of intimacy : sexuality, love and eroticism in modern societies*, Polity Press : 1995 『親密性の変容：近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』 松尾精文・松川昭子訳 而立書房
- Hornbacher, Marya, 1998, *Wasted: a memoir of anorexia and bulimia*, HarperCollinsPublishers : 1999 『こんな体、大きらい! : 拒食と過食のメモワール』 屋代通子訳 日本放送出版協会
- 石川俊男他 2002 『摂食障害の治療状況・予後等に関する調査研究報告書』 厚生労働省
- 伊藤比呂美・斎藤学 1992 『あかるく拒食 ゲンキに過食』 平凡社
- Kasl, Charlotte Davis, 1989, *Women, sex, and addiction: a search for love and power*, Ticknor & Fields
- 圓田浩二 2000 「「吐く」という社会的行為：摂食障害者へのインタビューから」 社会学研究会編 『ソシオロジ』 第44巻3号(137号)所収 pp.75-92
- 圓田浩二 2001a 「嗜癖としての摂食障害：セルフ・コントロールと強迫する社会」 日本社会病理学会編 『現代の社会病理』 第16号所収 pp.41-53
- 圓田浩二 2001b 『誰が誰に何を売なのか? : 援助交際に見る性・愛・コミュニケーション』 関西学院大学出版会
- 圓田浩二 2002 「摂食障害と家族：家族が摂食障害をうみだすのか？」 現代社会理論研究会編 『現代社会理論研究』 第12号所収 pp.196-206
- 圓田浩二 2004 「摂食障害男性の原因論」 『沖縄大学人文学部紀要』 第5号所収 pp.55-63
- Millett, Kate, 1970, *Sexual politics*, Doubleday : 1985 『性の政治学』 藤枝滯子・横山

- 貞子・加地永都子・滝沢海南子訳 ドメス出版
NHK「日本人の性」プロジェクト編 2002 『NHK日本人の性行動・性意識』 日本放送出版協会
Ofshe,Richard & Watters, Ethan, 1996, *Making monsters:false memories, psychotherapy, and sexual hysteria*, University of California Press
小倉千加子 2001 『セクシュアリティの心理学』 有斐閣
山口椿・ささらえゆうな 1993 『プリミアーナ：精神病質と自己破壊』 青弓社
Young-Eisendrath,P 1993 「もつれ：女性の発達における食物、性、攻撃性」 村本邦子訳
『女性ライフサイクル研究』 第3号所 <http://www.flcflc.com/study/article/article01/06.html>

The eating disorder patient's sexuality: From a viewpoint of eating and sexuality

Koji MARUTA

Abstract

It is said that eating disorder patients are often the victims of sexual abuse, or it is pointed out when love dependence and sex dependence supervene the disorder. This paper analyzes the relationship between eating and sexuality of the eating disorder patients by clarifying the actual state of their sexuality.

Then, the following two questions are set up in this paper. First, in the eating disorder, what relationship exists between eating and sexuality? Secondly, how is the sexuality of the eating disorder patients different from that of other people? If supposing that there is a difference, what is the nature and degree of that difference?

Two types of data were used: An interview survey conducted by the author of 35 eating disorder patients, and Japanese national statistical surveys. Analysis showed that eating and sexuality were related strongly in the eating disorder. Moreover, an eating disorder patient's sexuality was the same as that of other people. However, it turns out that they are experiencing difficulty in their mental and emotion health.

Key words: eating disorder, sexuality, interview survey,
eating and sexuality, sociology